

2025年2月8日

13:00～14:50

繊維学会 臨時理事会議事録

1. 確認事項

出席理事 辻井敬亘、村瀬浩貴、濱田仁美、増田正人、松葉 豪、永田謙二、末信一朗、
氏家誠司、武野明義、花田朋美、竹中幹人、木村睦、巽大輔、高崎緑、神山統光、
出口潤子、増森忠雄、香出健司、清水宏泰、東城武彦
(オブザーバー参加；平佐多久晶)

欠席理事 櫻井伸一、中澤靖元、上高原浩、内田哲也、道信剛志、大松沢明宏、山崎睦生、
小泉聡、森下美由紀、石澤仁志、大田康雄、小原奈津子

監 事 土田亮 (敬称略)

会 場 zoom システムを利用したハイブリッド開催

対面会場 繊維学会事務局(品川区上大崎 3-3-9-208 最寄駅 JR 目黒駅)

理事 30 名のうち、出席理事 20 名、監事 1 名の出席を確認し、定款 36 条により本理事会は有効に成立した。本理事会は、ハイブリッドにて開催し、理事の意思表示は発言や挙手にて決議することを確認した。続けて、辻井会長が議長となり臨時理事会議事へ移った。

2. 審議事項

1) 繊維系三学会合併協議について

資料 1_課題の整理のポイント、資料 2_三学会統合に関する方針に関する提案、資料 3_繊維系三学会合併協議に関する前回理事会でのご意見、資料 4_財務グランドデザイン(20250208)を用いて、繊維系三学会合併協議の現状について辻井会長より説明がなされた。主なポイントは以下のとおり。

・「課題の整理のポイント」には、合併協議案の前回案と今回案の違い、公聴会等で指摘された事項等、合併理由や合併協議の進め方、スタンスについてまとめた。ポイントとなる学会名、ビジョン・ミッション、運営体制、論文誌・学会誌、研究発表会、催事セミナー、支部・研究委員会、国際化、事務局、財務の問題について、合併協議会へのフィードバックにあたり、本臨時理事会で議論し、各論のみならず、もう一度見直しができるかと考える。

・合併可否で重要なビジョン・ミッションはもとより、持続可能な学会運営ができてこそである。「財務グランドデザイン」では、特に指摘事項である事務局問題と財務問題について、会費収入見通しの見直し、各項目へかける費用、運用方法の重要性などを再精査し、課題を克服する必要がある。人件費については専門家へ給与体系の適正化について相談、事務局費については、2 拠点とした場合の固定費等々の精査、見直しが必要。

・「繊維系三学会合併協議に関するご意見」では、前回理事会議事録から、重要な理事のコメント部分をまとめた。

・「三学会合併に関する方針に関する提案」として木村理事から説明がなされた。現状予算から考えると、新学会予算が 8,500 万円になることは事業を拡大することを意味する。ただ、合併したとして正会員が 1.5 倍程度になる想定であり、リソース的により厳しくな

るだけではないか。現状のビジョン・ミッション案はこれで構わないが、裏のミッションは、繊維に関わる学術もしくは、科学技術に関する学会を後世まで残すことである。シミュレーションからも分かる通り、会員減少が続く中で高齢化も進み、その中で限られたリソースをどうやって配分していくのか、学会として体をなす最低限の機能は何かを今一度考えるべき。情報を発信する年次大会、学会誌はメインストリームであるが、その他に関しては附則的に後から生まれ、いろいろな活動として付与されてきた。この統合を機に、一旦今までの事業をスリム化し、全部継続する概念を捨て、ミニマムでどういう事業ができるかを検討すべき。また、その中でどういうお金がいるかを、もう一度精査すべきである。現在の協議案は、三学会の伝統と歴史を継続するだけであり、その概念を一回捨てないと、後世に学会を維持するために無理をするだけ。組織があればあるだけ、その活動を維持せざるを得ない状況であり、統合を機に、支部・研究委員会を一回ゼロに戻してはどうか。その中で、例えば大型の科研費や NEDO プロジェクトを作るための研究委員会があってもよいが、ただし時限的とすべき。若手に関しては継続的に委員会を作り、更に理事に入ってもらうなどして、どんどん意見を言ってもらえる組織に作り変えていくべき。これらを実現するためには、平場での議論はしがらみが多すぎて進まないと考えるので、ぜひトップダウン（辻井会長の判断）で、一番縮小した形の、あるべき姿を検討いただくことが必要ではないか。

【説明に対する質問・意見】

- 現在の合併協議案は叩き台と理解しているが、今後の活動をより拡大する、縮小する路線は、今後どうやって誰が決めるのか？更に、それをどうやって、いつの時点で会員へ伝え、どういうふうに決議をされるのか。

→ 今回案はあくまでも協議会案で、これを叩き台として各学会でどういうスタンスで合併に臨むのかを提案、協議会へフィードバックする。協議会では、理事会をベースに三学会で議論をしつつ、最終的に「合併可否判断をする合併案を提案」し、理事会に持ち帰って承認、会員に真意を問う形を想定している。その際、当然ながら、繊維学会として最終案を受け入れるかどうかは、最終的に議決権行使で会員の総意で決めることになる。なお、それまでに、更に議論が必要ということになれば、そこに時間を取る必要があると思っている。

何れにしても、各学会からのフィードバックをどういう形に落とし込むのが重要である。フィードバックのプロセスを何度もやれば良いが、学会運営的にも、携わっている方々のエフォートから考えてもそれは難しく、一度のフィードバックで最善と思われる案を作り各理事会に諮ることになる。理事会で、議決権行使に進めても良いかどうか、あるいは進めてもよいが会員へ更に説明をすべきなどを含めて総合的に判断することになる。思い切ったミニマム案をフィードバックし、それを繊維学会が相対する合併案とした場合、思い切った案であればあるほど、会員への説明は更に必要になってくる。ただ、良い意味で思い切った案にしなければ、新学会として次世代を見通せないということになると考える。

- もし統合して、三学会から編集委員会へイーブンに人を出すようなことがあると、人数だけがが増えて業務は変わらないことも心配になる要因。学会に関われば関わるほど疲弊する状態を作ってしまうこと、「もう学会に関わりたくない、関わらなくてもいい」と

いう風潮になってしまうことも懸念事項。加えて一次協議案は、予算稼ぎの為に色々行事を開催し事業を運営しなくてはならない構成で、現実的にはかなり厳しいと感じる。
→説明が不十分なところであるかもしれないが、1学会としてどうあるべきかで議論をしてきた。ただし、財務の問題については切り込めていなかったと考えている。

- もし現状の繊維学会予算で十分な活動には至っていないと総括するのであれば、結局予算が増えたとしても十分なサービスができないということではないのか。財務に関してちゃんとした解決になってないと感じる。大学だけでなく、企業側も深刻な問題を抱えられているはずで、8,500万円予算を集金すること自体が結構大変ではないか。

→新学会としてどういうところを目指すのか、どういう活動が必要なのか。考え方としては、ミニマムでスタートしてそこから少しずつ活動を強化していく選択と、もう一つは合併の大きな転機で良いスタートダッシュを切るために、全てを縮小するのではなく強化する部分をしっかり考えながら検討していく選択。その上で、最適な案にはこれだけの経費がかかるが、その経費が果たして持続可能かどうかは次の問いになるのかと考える。そこはトレードオフになるので、落としどころは当然ながら考えていくべき。そういう意味で、ミニマムスタートなのか、活動基盤を確保していくためしっかり投資し強化するのかの考え方が必要。ただ、その範囲を議論する必要があると思う。

- 選択と集中となると、大学でも企業でもフェアになるのがなかなか難しい。

→ミニマムな部分は選択となるが、新学会の考え方やスタイルに基づいて行えば、それは選択と集中の問題ではないのではないのか。学会の基盤をどういうふうに構築するのかの議論になる。

- 合併しなくても繊維学会として取り掛からなければならない課題はあるが、今までの意見の中で問題なのは、「合併しない」という理由になり得るような重要項目があるのかどうか。詳細は合併が決まってから皆で討議しながら進めればよいことであり、公聴会での意見は、ただただ問題だから言っているだけでよく分からない。まずは、「この形で合併しますがいいですか？」と会員へ問うではどうか。先に合併することを決めて個別のところは個別に、もし重要な案件であれば、もう一度会員に聞く形で進めてはどうか。全部一度に決める必要はなく、「完全な完成形を皆で示して承諾し合併する」のは無理があるのでは。もし今回の合併に対して大きな問題点でないのであれば、その部分は切り離して考え、「合併は問題ない」と言えるような形を作りたい。

→皆様のコンセンサスが得られてないところ。今後、三学会合併可否の判断に必要な重要事項を選択、検討しておくことが大きな方針。これをしっかりと議論する必要がある。もう一つは、ある程度、持続可能な運営ができることが担保されているということも大事。その上で合併可否判断をしていただき、その後、色々な課題を具体化し検討すべきだが、その切り分けが上手くできていない。

- 合併に反対されている方たちは、繊維学会が今のまま持続可能と思っている節があるが、大分以前の理事会では、財務的にあと何年しか持たないなどの危機感があった。70周年や小島先生の寄付金があったことで、繊維学会だけが財務的に楽勝で他の学会が先々危ないとかの話があったが本当そうなのか？収入は減少傾向で、支出は固定費含め増加傾向にある現状を考えると、赤字を事業で賄わなければならない数字は明確で、現在の繊維学会は持続可能でないと考える。合併反対の方からは合併のメリットがあるか聞かれるが、それを全て示していたら多分何十年もかかってしまう。やはり、大枠でい

い、というやり方で進め、中身を良くして運営していくのが望ましい。繊維学会も、もうお尻に火がついている状態であることを示すべき。企業でも工場や事業所の閉鎖の際は愛着もあり様々な意見が出るが、事業が立て直されて結果が出れば、良かったというふうに思う。目先だけ見ている現状は、決して持続可能であると思わないでいただきたい。今後、事務局費用が上がって、色々な物価上昇に伴う支出は増えていくなかで企業筆頭に会費などの収入が減っていくと赤字幅がより大きくなる。3学会、特にアカデミアが同じ方向性で一致できない状態というのは非常に悲しく、ちょっと情けないと思う。

- 合併に関する情報発信が不足している指摘があった点についてどうすればよいか。合併に関して興味がないのか、それとも、関わると面倒くさいことになると思われているのか。議決権行使となった場合に、ぜひ自分が所属する団体の方向性を賛成反対（白票を減らし）で示していただくことが重要。

→4回公聴会を開催したが、参加者はごく一部に留まっているのが現状。理事会、合併協議会議事録も公開はしているが、情報がまだ広く伝わっていない印象。現実的に、膨大な議事録を読んでもらうことは困難かと思うが、最終的に、議決権行使に進む前には、この理事会に対する信任を得られるような大きな方向性を示したメッセージを出すことが大事だと考える。ビデオメッセージを作成して会員に見ていただきたいと考えている。

また、一つの機会としては、フィードバック後の最終合併協議案を年次大会で会員に提示し、繊維学会としてのスタンスを説明するのが重要と考える。また、三学会間で交流が深まるようなきっかけとなる企画についても検討、提案いただいている。

議決権行使をどの段階でやるのか、本日の臨時理事会で議論させてもらいたい。繊維学会としての議論がしっかりできていないと、結局新学会で良いスタートが切れない。それでは元も子もないので、議論に時間をかけも良いスタートを切れることが大事。その意味では、理事会として合併の方向性を承認した上で、議決権行使までの間は会員への周知と意見交換を継続していく。その内容として、大きな方向性というものに対して賛否を問い、各論に関しては合併のゴーサインが出た後で検討します、というように切り分けて説明をさせていただく。最終的には会員判断ではあるが、理事会は会員からの判断を委託されて運営している。理事会として承認した案で、会員に対して説明するのが次のステップであると考えている。

- 走りながら中身は決めていけばいいとの意見もあるが、一方で、合併してしまうとその形で走らざるを得なくなることもあり、結局、負荷が若手にいくのではないかとそれが結果的に会員減少につながる可能性もあるので、一度リセットするのは大事。合併するとしても、試運転的な運用ができるといいのではないかと。繊維に関連して集まり議論するコミュニティとして、後進にとっても魅力的でバランスの良い形の学会活動を継続していけることが重要。
- 世の中全体で繊維技術の位置付けが下がってきているが、繊維学会に参加している上では、アカデミア・企業・官がよい関係で交流できている印象をもつ。ただ、企業の若手を考えると、働き方改革等が叫ばれる中、休日や業務時間外に学会へ関わること、何らかの役をすることに関して言いにくく、やりにくいのが現状。発表などでアカデミアとの交流や関わりを通して、企業の技術者にも社会貢献をしている達成感を感じる場、自己実現のできる学会であってほしい。合併することで、働きが全部三倍になるのではな

く、会費の面についても、時間的なその労力についても、極力コンパクトになりながらも、三学会のテリトリーをコンパクトに実現できる方向で進めて欲しい。

→ 会員からの理解を得るためには、三学会協議としてではなく、繊維学会の問題として現状分析を示さざるを得ない。繊維学会の現状を見直した上での持続の能性、将来構想実現が現状として可能なのかどうかという議論になろうかと思う。将来構想を踏まえて、合併した方が良いのか、あるいは単独でいった方が良いのか議論を見直すタイミング。

大きな変革を生み出し持続可能な新学会としてスタートするためには、三学会のこれまでの活動は基本的に白紙に戻したうえで必要なものを構築していきましょう、となると、なかなかイメージも湧かず合併案にはならないが、新しい学会の方向性として学術技術の向上と異分野融合や新分野開拓、人材育成と人材交流、分野貢献や社会貢献が三つ柱となることがビジョン・ミッション案にも盛り込まれている。その観点で、出版、行事、催事などの活動で必要なものは何か、更に良いスタートを切るためにはどういう艇入れが必要かを含めて大枠を提案し、三学会から合併のゴーサイン出た暁には、どういうところを具体化していくか、出来ることと出来ないことは当然あり取捨選択することになるが、大きな方向性を議論する方向へ持っていければと思う。

- 前回の理事会で学会誌に関する懸念の声が多く聞かれた。学会誌の電子化と年間12号発刊の継続などに関して、将来構想委員会と編集委員会の連名で会員アンケートを実施したい。冊子で絶対欲しいという方、電子でいい方、Jstage利用のあり方など、近々会員の皆様に届く可能性があることをこの場でお伝えしたい。結果は、理事会で報告させていただく予定。繊維業界の厳しい状況は報道にもある通り。繊維学会も毎年100万円ほどの赤字を、10年に一度の国際会議などでカバーし運営してきたが、それもだんだん苦しくなってきたことも事実。そういった時に、収入を増やす活動自体のマンパワーを捻出することはものすごく大変。学会誌発行に関して縮小していかなければいけないのは明白で、完全電子化で皆様のご了解が得られたら、相当支出が減らせると考える。ただ同時に、広告費、学会誌購読料収入がなくなることも思案しなければならないが、支出が減る効果の方が多分大きい。三学会が合併した際には、当初から電子化を選択することも選択肢になる。

→ 財務問題や現状問題で、協議会では学会誌の電子化などについて十分に踏み込めていなかった。中長期的に分野が融合しその中で人材を育てていくツールという意味で学会誌はすごく大事。編集委員会と執筆いただく方の負担軽減をしながらも、良い紙面づくりがどうやったらできるか、今回のフィードバックで再検討が必要。やがてこうなるのではないかも想定しながら、この機にぜひ改革するところを、もう一度WGや協議会メンバーで意識共有を図り、議論したい。それを、其々の学会に最終案として持ち帰り、自分達の学会にとって一番いい選択肢だということがちゃんと伝えた上で、単独運営を選択するか統合を選択するかを問うことになる。学会誌・論文誌はこれまでも文化の問題とかいろいろあるが、基本的には一学会として一つの論文誌を確保し、自分たちの活動基盤を強化する、分野の振興のためにしっかり位置づけていく。

- 基本まっさらにしてとの提案は良いと思う。ただ、それは新学会の理事が、もう一度自分たち（三学会）が持っていた資源をどうするかを検討していただいたうえですべきこと。統合前に会員へ伝えると不安を煽るだけになるのでは。我々理事会としては、統合しない選択肢はなく、つまり統合しないなら体力のない学会から順番に解散し、

それを他学会が吸収するみたいな効率の悪いことになる。各学会に力があり、色々なものを持っているうちに合併し、より力を強くしましょうが今回のコンセプト。ところが、そう進めたいが、会員の皆さんに理事会が統合するように誘導していると思われるのも困る。一方、比較的無関心な会員も多い中、投票が始まってから「そんなの聞いていない」「どんなことなの」と思う方が多いのでは。それまでに公聴会開催、学会誌等で通知をしてもそういうことは全然知らず、気にもされていなくて、その段になって急に気にされる方も多いはず。その時に、公聴会の様子や合併の経緯がHPなどで簡単に見られるようにしておき、皆様に公表していたことが伝わり、少なくとも急だったというイメージにはならない対応が必要がある。それと、現在関わる活動が、まっさらになってしまいもしかすると、関係する研究委員会も無くなってしまうかもしれないと思われることは大きくマイナス要因。多くの一般会員にとって、「今までと変わらず活動でき自分に影響がない」けど、少し新しくなって良くなることもあるのかな？ くらいの感覚の方が多ければ、投票しやすいと思う。実際に運営し始めたら、木村理事の提案資料のように、基本、新理事会には真っさらなところから考えていただきたい。

2) 最終的な合併協議案について

最終的な合併協議案をフィードバックして協議会に戻す上で、繊維学会としてどういうポイントを含めて議論してほしいか。辻井会長から下記の説明がなされた。

【学会名の問題】

繊維学会からのフィードバックとして、「繊維学会」とするのか「日本繊維学会」とするのかについては、日本をつけることでプレゼンスが下がってしまう懸念もあることは承知している。これは結局、新学会として決めれば良いのではないかと思う一方、新学会立上げには学会名を決めておく必要がある。

【ビジョン】

将来構想委員会で検討しているアクションプランへフィードバックし、より強化する

【運営体制】

どういう事業をどういうコンセプトでやっていくのか、その中で、会員や事務局負担を軽減するかを考えた上で、最適な構成とする。

【論文誌・学会誌】

本理事会にてご意見いただいたとおり。学会誌についても然り。

【研究発表会】

年次大会と秋季研究発表会は、重要な核となる事業。特に異分野融合が進んだ新学会のメリットを十分に感じられるように実施すべき。ただ、繊維学会規模で年2回の研究発表会を開催するかどうかは検討が必要。2回開催はメリハリをつける前提で検討し同時に、運営実行委員会負担が軽減できるような工夫が必要。事務局体制の強化とDX化。

【催事】

催事は、特にテキスタイルカレッジ。日本繊維機械学会のテキスタイルカレッジに対する思い入れも強く、長年開催してきている。社会に必要とされている講座と判断するのであれば、社会貢献の意味でも分野振興の意味でも継続すべき。ただし、その部分については

まだ十分精査されていないのではないか。そこを真摯に見つめ直して、（合併決定後、会員企業の意見を含めて）テキストイルカレッジも刷新していく方針とする。

【支部・研究委員会】

本部と支部との役割について、もう一度協議会で議論してほしい、大きな見直しが必要など、前回理事会でも課題をいただいた通り。研究委員会はとても大事。フィードバックの際に、ここそ現状の活動は白紙に戻し、新学会としてどういうふうに変わっていくのか、自分達の研究分野も学会合併を機に大きく発展させるチャンスであるとの視点でもう一度よりしっかりした提案とする。このコンセンサスは、各学会で地道に議論しておく必要がある。この提案をする時、少なくとも繊維学会として、研究委員会を白紙に戻し、新しいスタンスでもう一度考え直すことを研究委員会委員長会議等で議論しておく必要がある。

【国際化】

国際化については必然的にやっていくべきこと。ただし、内容や手段が合併可否判断に関わることはないので、ここは三学会が一緒になることが決まった段階で、より具体的に検討していく。

【事務局・財務問題】

やはり課題は、事務局と財務の問題。事務局に関しての繊維学会として議論は2つ。まずは2拠点化の問題。いずれにしても移行期は2拠点でいかざるを得ないが、個人的には色々な条件さえ整えば、2拠点のメリットを生かした事務局運営が可能と考える。ただし、そこでの問題は、その境界条件が成立しなかったとき、どういうふうに1拠点化へ進めるのかという点。現状の案には1拠点化へのロードマップがないので、今後、議論を進めるうえで組み込んでおく必要がある。繊維学会判断として、持続可能な学会を想定した際に、移行期の2拠点は致し方ないが暫定的であり、やはり1拠点と考えるのであれば、それを合併案に入れておくべきとする判断もあり。

財務の問題は財務グランドデザインの方針をもう一度検討し、予算規模はさておき、各事業や行事の位置づけを組み込んだ、新学会としての財務グランドデザインが必要。会費収入、広告収入の部分が達成可能かどうかについては、再度シミュレーションを出していかざるを得ない状況。もう一度協議会に投げ返して、細かな数値よりは大きな方針を検討してもらおう。

今後は、三学会合併に向けて最終案を理事会で承認し、それを各会員に可否判断いただくまでの間に、（議決権行使までに時間をとり）お互いの学会を知り、交流が図れる企画を開催しませんかとの提案もしたい。また、学会の年齢構成の問題についても向き合う必要がある。特に若手の負担をどのように軽減していくのか、更には、どのようにして若い会員や企業の個人会員が増えていくような魅力ある学会にするのかも訴求していきたい。

- 辻井会長の説明では、合併することを先に決めておいて細かいところを後で考えると言われていると思うが、（例えばホンダと日産の合併の話があって、最終的に株主総会で株主の議決を取ると想像するが、）結局、ディテールをちゃんと決めておかないと、議決はできない気がするがどうか。後で何とかすればいいという可能性はあるか？また、合併が決まってからディテールを決めればいいっていうのは、そもそも株主（会

員)を誤魔化しているというか、そういうふうに取りられるような気がするので、あまり言わない方がいい気がするがいかがか。

- これからの繊維学会のあるべき姿を示している合併協議の答申には大賛成。学術の追求だけでなく企業の若手にとっても、学会が若い人が切磋琢磨できる魅力的な場として、繊維産業に関わる若手に夢を持っていただくものであってほしい。財務については、これ以上確度の出しようがないのではないか。あまりそこにばかり労力を費やすのはどうかと思う。今足りないのは、ミッション・アクションプランに対して、限られた原資からどうウェイト付け、予算規模からの分配比率を明確にする議論をすべき。
- やはり重要なのは優先順位、重み付けではないか。現状の提案では全てが並列で書かれているが、合併を機に、繊維学会としては年次大会をメインとする学会にしましょうとか、やはり大きな方針変換が必要ではないか。全てをフラットには極論かもしれないが、少なくともこれからの状況を考えて、全ての活動をそのままやることは現実的ではないことは、皆さん同意見だと思う。その中で、どういうふうにするのかを平場で、全員で議論することでない気がしている。ある意味、三学会長間で少し議論されてはいかがか。

→ 例えば、その催事の問題にしろ、支部・研究委員会の問題にしろということか。

- そうなると、例えば事務局の仕事、会員の役回りなどで、どういうリソース配分になるのかが決まってくるはず。それが、どれ位リアリティがあるかだと思う。

本日の議論に関して、理事会で発言された方もそうでない方からも、全ての理事からの意見を事務局宛にメールいただきたい旨、辻井会長より伝えられた。いただいた意見は事務局でまとめ、執行部で相談し、三学会会長へフィードバックし、最終案に向けての方針を検討することとする。

3. 監事コメント

【土田監事】

本日の臨時理事会では、繊維学会が本当に持続的かどうかという点について指摘いただきましたが、会員の年齢構成を見る限り、会員減少が一番問題と考えている。アカデミア、企業を含め、若手の供給が途絶えてしまっていることが最大の問題。これは、すぐにどうこうできるとは思いませんが、少なくとも若手会の充実などで、少しでも会員減少に歯止めをかけていきたい。協議については、全てに合意していただくのはなかなか難しいが、辻井会長には非常に丁寧な対応をしていただいている。資料についても全て読まれるかはわかりませんが共有していただき、会員の皆様により理解を進めていただけるよう、丁寧な対応と情報発信をしていただきたい。理事の皆様、本当に大変だと思いますが、協議案など、会員の皆様の理解を得て、是非いいものにしていただければありがたい。

臨時理事会 議事録署名人 捺印

議長： _____ 印

監事： _____ 印

監事： _____ 印

監事： _____ 印

以上